回転蔟から取り出され、出荷を待つばかりとなった繭。上品な光沢をたたえています。

特集

いま伝えたい手仕事――

ともしび守る町内ただ一人の養蚕農家

昭和5年、愛媛県内に5万5,846戸いた養蚕農家は2016年現在わずか11戸。そのうち1戸が町内に残るただ1軒の養蚕農家、梶田マサコさん（梶郷下）です。蚕を飼い続けて60年以上。今かろうじて町内養蚕業のともしびを守る梶田さんを取材しました。

6月上旬、繭の出荷を控えて作業にいそしむ梶田さんの作業場を訪れました。

天井から吊り下げられた「回転蔟」と呼ばれる棚に繭が整然と並んでいます。「回転蔟」は縦4センチ、横3センチの小さな部屋に区切られていて、餌場から移された蚕は、自然とその区画に収まって3日ほどで繭をつくるのだとか。なかには繭を作れなかったり、区画に収まらない蚕もいて、梶田さんが棚を回転させながら手際よく取り除いていきます。

64年前、お嫁にきて以来、養蚕を続けているという梶田さん。現在は、春と秋の年2回、繭を出荷しています。春は春蚕、秋は秋蚕と呼ばれ、かつてはその間に夏蚕も行っていたそうです。

「回転蔟」は昭和30年代後半から使われるようになり、蚕の排泄処理が格段に楽になりました。同じ頃、養蚕施設の整備が奨励され、家の中で蚕を飼う「お座敷養蚕」はなくなっていきました。

この春、梶田さんは、5月上旬に八幡浜市の蚕種会社から体長5ミリほどの蚕を仕入れて、桑の葉を与えて育ててきました。「赤ちゃんを育てよるようなもんよ」と笑う梶田さん。桑を与えるのは1日3～4回。桑畑の往復で1日が過ぎ、外出する間もないそうです。その間、蚕は猛烈な食欲で桑を食べ尽くしてぐんぐん大きくなります。

翌々日、再び梶田さんの作業場を訪れると、そこには真っ白で上品な光沢をたたえた繭が山積みになっています。ついさっき「回転蔟」から取り出され、表面に薄く残る毛羽と言われる糸を取り除かれたばかりの繭です。出荷を明日に控え、梶田さんが一つずつ丁寧に確認しています。

愛南町唯一の養蚕農家　梶田マサコさん

回転簇が並ぶ梶田さんの作業場。中には繭が整然と並んでいます。

梶田さんの繭は一旦、鬼北町のＪＡへ集められ、その後、滋賀県へ運ばれて近江真綿布団などに加工されます。ちなみに真綿というと綿（コットン）のように思いますが、実は絹（シルク）のこと。真綿布団は軽くて吸湿性、放湿性に優れた高級布団です。

現在でも国内外で高い評価を得ている国産生糸ですが、梶田さんに後継者のことを尋ねると「いない」ときっぱり。

町内では昭和初期の最盛期に４，９００戸近くあった養蚕農家。いまはそのともしびを梶田さん一人が守り、静かに秋蚕のはじまりに備えています。

養蚕 作業の工程

①新緑が美しい桑畑。蚕は新鮮な桑の葉だけを食べて育ちます。そのため養蚕は桑の葉が収穫される時期に合わせて行われています。

②八幡浜市にある蚕種会社からふ化後 10 日ほど飼育された蚕が届きます。蚕の食欲は日に日に増して、桑採りと給桑を繰り返す忙しい日々が続きます。蚕の成長に合わせて飼育面積もどんどん広がります。

③桑は１日に３～４回蚕に与えます。桑を切る作業は重労働。剪定ばさみで１本ずつ切り取ります。

④蚕は脱皮する前に餌を食べずにじっと動かなくなります。その状態を眠と呼びます。孵化してから約４週間の間に４回眠り、４回脱皮して熟蚕となり繭を作り始めます。蚕はその間に体長で 15 倍、体重で１万倍に成長します。

⑤蚕は家蚕とも呼ばれ、畜産化された昆虫で野生には生息しません。野生回帰能力を完全に失った唯一の家畜化動物として知られ、人間の管理なしでの生育は不可能です。

⑥梶田さんは、蚕が糸を吐く時期を長年の経験で知っています。熟蚕となった蚕を餌場からすべて拾い集め、回転まぶしと呼ばれる回転式の繭棚に移動させます。これを上簇といい、養蚕のなかでも最も大変な作業になります。

⑦蚕は繭にくるまる前に排泄をして、48 時間以上かけて糸を吐き繭を作ります。蚕が吐き出す１本の糸は同じ大きさの鉄と比べるとはるかに硬く強度があり、繭をほぐすとその糸の長さは 1,200m 以上あります。

⑧出来上がった繭は手作業で一つずつ取り出し、機械を使って不要な糸を取り除きます。梶田さんがつくる繭は鬼北の JA に集められ、そこから滋賀県に出荷されて上質な近江真綿の布団になります。

（資料提供：稲田 和美さん）

梶田さんの桑畑は秋蚕に向けて手入れされています。60 年以上大切に育てられた古木に新芽が芽吹きはじめました。

数十年前まで日本の重要な産業の一つであった養蚕は、人造繊維の進出や経済不況、貿易の自由化による経済構造の変化により急速に衰え、いまや風前のともしびです。

「日本の近代化を支えてきた養蚕業がなくなろうとしている。」その現状を知った稲田和美さん（長洲）は「養蚕を記録に残したい」と昨年の秋から梶田さんの仕事に密着して、その作業の一部始終を記録に収めてきました。

寄稿

近代化支えた養蚕 消えつつあるいま記録に

稲田　和美

愛南町に唯一軒残る養蚕農家、梶田マサコさんの養蚕記録を残したいと思ったのは、二年前、南猫工房の松原郁子さんとお会いしたのがきっかけでした。松原さんは糸となる素材をご自身で作り、紡いで織る作業をされている方。梶田さんに弟子入りして繭作りを教わっていたのです。「今や消えつつある養蚕農家のことを皆に知って欲しい」という松原さんの言葉が心に残りました。

そして昨年の秋、松原さんに同行して、たった一人で養蚕を守る82歳の梶田さんの所へお邪魔したのです。その日は養蚕の中でも特に忙しい「上簇」と呼ばれる作業の日。新鮮な桑の葉を沢山食べて成熟した蚕を、繭を作らせる為の道具「回転簇」に移していました。桑採りや給桑などはほとんど一人で行う梶田さんですが、この日ばかりは近所に住む娘さんがお手伝い。蚕舎に入った瞬間、２段の棚いっぱいに蠢く蚕に一瞬怯んだ私。でもすぐに見慣れ、ぷにぷにですべすべの蚕は触り心地も良く、何だか愛らしくも見えてきました。昔ながらの道具を使っていますが、初めて見る養蚕は新鮮。今記録に残しておか

八幡浜市にある愛媛蚕種株式会社にて
写真中央が筆者。左から兵頭社長、松原郁子さん。

愛南町養蚕の主な出来事

（「愛媛蚕糸業の歩み」　編集発行：「愛媛蚕糸業の歩み」発行委員会　平成12年）より抜粋

年	項目	詳細
明治9年（1876年）	製糸を開業していた記録	城辺村・二神彦一（7年開業）、御荘村・中尾喜馬太（8年開業）、緑僧都・臼杵寛成（9年開業）などがある。13年に一本松村・蕨岡重正が関東に出向き、養蚕術を修め、帰村後に桑を植え、当初は山桑を集めて飼育を開始したとある。
明治40年（1907年）	郡立南宇和水産農業学校が設立、蚕業科が置かれる。	教育を受けた地方の子女が、卒業後養蚕知識を広めたことは当地方の養蚕普及に大きく貢献した。
大正10年（1921年）	郡内養蚕概況	養蚕戸数1，523戸、桑園面積286町、繭生産量3，633石（繭代金271千円）となり、海岸部から山村にかけて桑が畑作物の王座を占めた。

なければと思い、「来年は養蚕記録を撮らせてください」とお願いしました。

５千年前に中国で始まった養蚕。美しい絹は珍重され、シルクロードで世界に伝わりました。日本へは稲作と一緒に紀元前２００年頃、伝わったとされています。

皇后陛下もされる養蚕は、稲作や機織と同じく、もっとも古い日本の文化なのです。

ご存知の通りかつて生糸は日本の近代化を支えた花形輸出品でした。それを支えたのが養蚕です。最盛期の昭和４年には養蚕農家は２２１万戸超。養蚕は換金性が高く、他の作物の栽培に適さないような山間部でも営農が可能で、かつては山がちなこの島国の至る所で養蚕が行われていました。

愛南町の養蚕の歴史や流通も気になった私は、松原さんや友達を誘って保内町にある愛媛蚕種株式会社を訪ねました。西日本で一軒だけ残る、蚕種を製造・販売する会社です。

明治17年創業、平成11年に建物は国の重要文化財に登録。梶田さんはＪＡを通してここから稚蚕を仕入れます。親切に対応してくださった兵頭社長のおかげで、養蚕に対して随分と理解を深めることができました。

愛南町でも明治期から養蚕が盛んになり、明治40年には南宇和高校の前身、郡立南宇和水産農業学校が設立され、蚕業科がおかれました。明治45年には蚕糸の資金流通機関として御荘銀行が設立。その後、養蚕技術の普及や国・県の補助事業の導入等で振興されましたが、昭和50年代頃から激減し、１３０年余り続く愛南町の養蚕も現在では梶田さんただ1軒となりました。

今や日本の養蚕業の自給率は１％以下。壊滅的な状況にあります。日本の絹は安価に入手される外国産に需要を押されていますが、大変品質が良く、現在でも高級の絹としては世界一のブランドを誇っているのです。日本の養蚕の素晴らしさを今一度理解してもらい、先人たちが築き上げた伝統文化が未来に残ってほしいと願うばかりです。

昭和３年～５年（１９２８～１９３０年）	郡内各地で養蚕最盛期を迎える		御荘町　養蚕戸数２，６４２戸　桑園面積９，８５０ａ　繭生産量１１４，０００kg 内海村　養蚕戸数５８０戸　桑園面積１１，８５７ａ　繭生産量６９，０００kg 緑僧都村　養蚕戸数２８５戸　桑園面積６，３００ａ　繭生産量５５，４７０kg 城辺町　養蚕戸数２５８戸　桑園面積６，２５０ａ　繭生産量２，９３３kg 東外海村　養蚕戸数２８９戸　桑園面積３，０５０ａ　繭生産量３，３７５kg 一本松村　養蚕戸数６５３戸　桑園面積１４，１２２ａ　繭生産量９２，５１３kg 西外海村　養蚕戸数１９２戸　桑園面積２，３７０ａ　繭生産量１３，７５５kg
昭和10年（１９３５年）	県蚕業取締所南宇和支所設置	南宇和蚕業技術指導所設置（県立南宇和農業学校内）	郡内養蚕技術の桑栽培や合理的飼育法など、蚕作安定などの技術が郡内全域に普及。職員３名を配置。組合担当蚕業技術員は５名。戦後の国内食糧事情が好転せず、桑園の食糧生産への転換が続いており、とくに漁村地帯で急激な養蚕の減少傾向を示していた。
昭和23年（１９４８年）	南宇和郡の気象・地質・地形など調査の結果、柑橘栽培の適地であるとされる。		柑橘振興・園地造成が進む。とくに漁村地帯で桑園が一斉に柑橘栽培に切り替わる。御荘町・緑僧都村・一本松村の柑橘栽培不適地においてのみ、養蚕を振興する方針となる。
昭和27年（１９５２年）	養蚕新技術の普及		養蚕の合理化によって労働力の余裕が生じ、規模拡大が進み、大型養蚕の台頭が見られるに至った。
昭和30年代	南宇和蚕業技術指導所廃止 北宇和蚕業技術指導所の直轄となる。		柑橘の高所得に対して、養蚕は32年の蚕糸不況に襲われ、国も桑園減反奨励を打ち出したことから、一挙に養蚕離れが始まった。指導対象基盤の減少により廃止となる。
昭和35年（１９６０年）			

昭和初期を最盛期とした郡内の養蚕は以後、蚕糸不況に加えて戦火拡大による蚕糸統制や食糧生産のための桑園転換によって減退を続けた。

昭和40年代において繭生産は伸びたが、農業担い手人口が出稼ぎのため町村外に流出し、養蚕農家数が減少した。養蚕従事者の高齢化とともに桑園の荒廃や養蚕規模の縮小が40年代後半から始まった。このため当地方の養蚕は健全な農家に集中され、さらにこれが協業経営による規模拡大へと進むこととなった。